

世界遺産地域における「語り部」の現状と今後の課題

On the "Kataribe" — Story Tellers — in the World Heritage Area
of Sacred Sites and Pilgrimage Routes
in the Kii Mountain Range

大 澤 健 ・ 江 本 みのる
Takeshi OSAWA & Minoru EMOTO

Abstract

In the World Heritage Area of "Sacred Sites and Pilgrimage Routes in the Kii Mountain Range", there are some unique guides and their organizations which are called Kataribe. They are originally organized as voluntary guides of local residents in order to increase visitors to this area. But after the area was registered as a World Heritage in 2004, they and their organizations have been encountering new stages of their history.

We have high expectation of the guides to take part in "sustainable tourism" of this area. There are two reasons for this.

After the registration, visitors to this area have been increasing dramatically and the guides can have been earning more money than before. It means they might become professional guides, which would play very important role in this less industrialized area. But there is also the fact that they are the voluntary-based guides, so that they can be leading themselves to another more important role to preserve the Heritage. If they play these two roles, they will take very essential position to part in "sustainable tourism" of this area.

This paper is researching their present situation and their possibility to go on this way.

はじめに

和歌山県を中心として、奈良県、三重県の紀伊半島3県にまたがる「紀伊山地の霊場と参詣道」が2004年に世界遺産として登録された。

この地域では、「語り部」と呼ばれる方々が多く存在し、活動している。本遺産の特徴は熊野古道という「道」が世界遺産となっている点であり、語り部は熊野古道を歩く来訪者に同行しながらその歴史や意味について多様な解説を行う。紀伊山地の霊場と参詣道は文化遺産

として登録されており、その歴史や地域の文化等を観光客に伝えることが語り部の主要な業務となっている。いわゆる「ガイド」としての性格が基本となっており、関係する行政もそのことを期待して育成、組織化を進めてきた経過がある。

もともと「語り部」は、観光ボランティアとしての性格を強く持ち、来訪者の拡大を目的として行政主導で育成されてきた。語り部がこのような形で生み出されてきたことには、地域の事情が反映されている。

全国的に見て、各「地方」において観光振興への積極的な取り組みが行われている。既存の産業の集積を持たない地域にとって、観光は地域活性化の最後の「切り札」なのであり、その振興が模索されている。こうした事情は世界遺産エリアでも同様である。この地域の大部分も経済的な基盤の弱い過疎地域であり、地域全体の観光振興が大きな課題となっている。「熊野古道」はそのための中心的な資源であり、その振興・活用がここ20年ほど模索されてきた。

「語り部」は当初ボランティア的な観光の応援団として、地域全体への来訪者の増大手段と考えられ、育成されてきた。特に、後に述べるように1999年の「南紀熊野体験博覧会」（通称「熊博」）および「東紀州体験フェスタ」の同時開催によって、その必要性が広く認識され、行政による積極的な育成が図られている。世界遺産登録以前のこうしたタイミングの良い動きがあって、語り部の存在が大きな意味を持つようになっていた。語り部の着実な育成と成長が進んでいる段階において2004年に登録を迎えることになった。

しかし、2004年の世界遺産登録によって、語り部を取りまく環境は大きく変化してきている。それゆえ、語り部の今後のあり方については、「観光ボランティア」という当初の意味を基盤としながらも、より発展的なステージを視野に入れて考えていく必要がある。

こうした「変化」のなかで考慮しなければならない点として、第一に、語り部は経済効果をもたらす「観光事業者」として成長していく可能性があるという点である。世界遺産登録後には語り部の需要が大幅に拡大し、語り部自体に一定の収入が生まれるようになっていく。それゆえ、語り部自体の新しい事業者への成長、あるいは、経済効果をもたらす観光事業への成長が期待できるようになってきた。世界遺産地域であるという特性を活かすことで外国人などの多様な来訪者を惹きつけられるのであり、外国語ガイド、外国人向けツアープランナーなどより多様な事業者として発展する可能性も生じている。

第二に、世界遺産に登録されたことによって、世界遺産の保全が重要な課題として再認識されることになったが、語り部はこうした保全を含む「地域づくり」に大きな役割を担う存在に成長している点である。もともとボランティアベースで育成されてきたことから、語り部には地域への篤い思いを持つ人々が多い。地域の魅力を来訪者に伝えるという「ガイド」機能が語り部の本来の役割であるから、地域の魅力を伝えるために、世界遺産の価値を地域内で保全・発展させる役割にも積極的に関わる意向をもっている。それゆえ、来訪者への伝

達という役割を越えて、地域の価値を集積したり、地域内への啓発を行ったり、という形で世界遺産の価値の保全と伝承に重要な役割を演じる存在でありうる。

「紀伊山地の霊場と参詣道」は単なる過去の文化的遺産ではなく、熊野の自然とともに育まれた『精神文化』が中心的な価値を構成している。こうした価値が過去のものとしてではなく、生きた文化として継承されていくためには、地域の「思い」を大切にしていく必要がある。人の心に生き続ける精神的価値を外部からの来訪者に伝えるとともに、その価値を理解し、地域の自然環境とともに保全し、継承するという点でも「語り部」は世界遺産地域に欠かすことができない存在に成長してきている。

つまり、「語り部」は、一方で、地域内での観光を振興して新しい観光事業者に成長する可能性をもつという意味で「経済的持続性」の鍵になる。他方で、「環境的持続性」と「地域コミュニティの持続性」においても住民の核となってその価値の伝承という役割を担うことができる。こうした特性は、観光資源の「保全」と「活用」の双方の結節点に位置するという意味で、「持続可能な観光」⁽¹⁾の展開にとって不可欠の存在になると考えられる。

そこで、本稿では、このような性格をもつ語り部の現状について考察するとともに、「持続可能な観光」の実現に向けてその特性を発展させるために必要な課題と方向を提示するものである。

第1章 世界遺産地域における語り部の現状

1-1. 語り部の成立経過と現状

「語り部」は和歌山県の観光ボランティア育成制度として昭和60年代から全県的に育成が行われていた。もともと熊野古道の語り部から発生したものであるが、この取り組みを全県的に拡大し、「紀州語り部」として組織化が行われている。

和歌山県観光協会が統括主体となって、1986年（昭和61年）に規約が整えられ、登録要領が定められている。

2006年段階では、「紀州語り部」として登録できるのは、

- (1) 語り部組織
- (2) 語り部組織に所属して活動する語り部
- (3) 個人で活動する語り部

と定められている。つまり、独自に組織化している団体は「語り部組織」として登録され、それ以外に関しては和歌山県および各市町村（または観光協会）が窓口となって個人での登録となっている。

(1) 「持続可能な観光」を一元的に定義することは難しいが、観光資源が存在する地域の「経済的活力」「地域社会（コミュニティ）の活力」「地域の自然環境」の3者のバランスが適正に保たれ、観光資源の保全と活用が持続可能な状態にある観光を意味すると本稿は理解している。

現在、和歌山県内で「語り部組織」として登録している団体は12あり、そのうちの8団体が田辺市、新宮市、那智勝浦町の3市町に存在している。

和歌山県の語り部制度は比較的長い歴史を有するが、各市町村に数名程度が通常であり、多くの市町村の場合には独自に組織化もされていない。熊野古道地域では、独自に組織化されている点でも、会員数の面でも語り部の存在が大きい。特に、世界遺産登録の中心地域一本宮町（現田辺市）、中辺路町（現田辺市）、那智勝浦町－は語り部として活動している人々の数が非常に多い。

旧市域における新宮市や田辺市の場合、街中を案内する観光ボランティアガイドとして活動がする人が多く、現在のところ、このような市街地型のボランティアガイドと「語り部」との性格上の違いが次第に現れてきている。

熊野古道関連地域⁽²⁾での語り部の組織は以下のようになっている。

このように和歌山県でも特に紀南地域に語り部が多く、組織化も進んでいるのは、1999年に開催された「南紀熊野体験博覧会」が「語り部」の整備・拡大にとって大きな機会となっ

表1 和歌山県における世界遺産地域の語り部組織

現市町村名		旧市町村名	語り部組織	受け入れ窓口（統括主体）	人数
和歌山県	九 度 山 町	九 度 山 町	高野山町石道語り部の会	九度山町産業振興課	53名
			紀州語り部		7名
	高 野 町	高 野 町	紀州語り部	高野町観光推進室	1名
	田 辺 市	田 辺 市	田辺観光ボランティアガイドの会	南紀田辺観光案内センター	45名
			紀州語り部	田辺市経済課	2名
		龍 神 村	紀州語り部	龍神村林業・産業観光課	3名
		中 辺 路 町	漂探古道語り部の会	熊野古道館	55名
			紀州語り部	中辺路町産業振興課	5名
		本 宮 町	本宮町語り部の会	本宮町語り部の会	39名
	白 浜 町	白 浜 町	紀州語り部	白浜町企画観光課	3名
		日 置 川 町	紀州語り部	日置川町産業課	3名
	新 宮 市	新 宮 市	新宮市観光ガイドの会	新宮市観光協会	29名
			紀州語り部	新宮市商工観光課	2名
		熊 野 川 町	熊野川町語り部の会	熊野川町産業建設課	15名
	那智勝浦町	那智勝浦町	那智勝浦町観光ボランティアガイドの会	那智勝浦町観光課	23名
			熊野・那智ガイドの会	那智勝浦町観光協会	23名
			紀州語り部	那智勝浦町観光課	3名

※2006年2月の調査時点での主な団体と人数

(2) 世界遺産地域には大辺路ルートの一部が含まれているが、この表では白浜町と日置川町（現在は白浜町）の分を載せている。

たためである。囲い込み型、パビリオン型の博覧会とは異なって、紀南地域をオープンエリアとして開催された同博覧会は、地域全体で体験イベント、体験ツアーを分散的に行っていくという極めて実験的なイベントであった。この博覧会において、熊野古道は中心的な役割を果たし、古道歩きへの誘客、熊野詣の再現が積極的に展開された。その際に、地域の歴史を伝え、観光客を誘導する役割として「語り部」の発掘、育成が行政主導で行われている。

この熊博と連動する形で三重県エリアでは「東紀州体験フェスタ」が開催されており、同様に伊勢路を中心とした語り部の組織化が進められている。これは三重県の東紀州活性化協議会が主導して行われ、これを契機に三重県の語り部も組織化されている。1999年に「熊野古道語り部友の会」が結成され、その後「伊勢路」の世界遺産登録に大きな役割を果たしている。

現在、三重県側（伊勢路）の語り部組織は、「熊野古道伊勢路語り部友の会」に一元化されており、登録者、稼働数も和歌山県側に匹敵する規模に成長している。さらに、峠ごとの伊勢路の保存会も組織され、ツアーデザインセンターなどが段階的に整備される中で、語り部と連携しながらトータルな保全と活用が行われている。

表2 三重県における世界遺産地域の語り部組織

活動地域		語り部組織	受け入れ窓口	人数
三重県	紀州エリア	熊野古道伊勢路語り部友の会	東紀州活性化協議会	230名

その後、2004年の世界遺産登録にともなって、奈良県でも語り部の発掘、育成、組織化が行われている。現状では、先行して組織化が行われてきた和歌山県、さらに1999年から力を入れてきた三重県に比べて、組織化、活動実績ともに整備途上にあると言える。

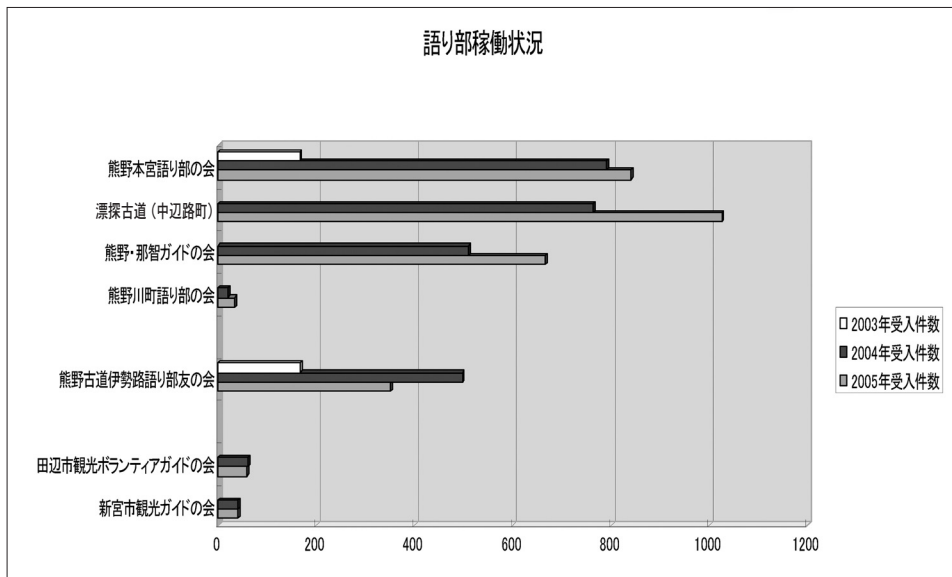
表3 奈良県における世界遺産地域の語り部組織

活動地域		語り部組織	受け入れ窓口	人数
奈良県	吉野町	吉野町観光ボランティアガイドの会	吉野町文化観光商工課	15名
	天川村	天川を学ぶ会	天川村地域政策課	42名
	十津川村		十津川村教育委員会	

1-2. 語り部の現状

2004年の世界遺産登録以降、語り部の重要性は決定的になる。登録後、同地域への来訪者は飛躍的に増え、それと同時に語り部の実働回数も大幅に増えている。また、主要な組織における世界遺産登録後の活動状況は以下のようになっている。

表2 主要な語り部組織の稼働状況



※ 2003年（平成15年）実績については、「熊野本宮語り部の会」と「熊野古道伊勢路語り部友の会」のみグラフ化

稼働状況を見ると、熊野古道の中心地域－田辺市本宮町、田辺市中辺路町、那智勝浦町－で、稼働している語り部の数、来訪者ともに非常に増加している。また、伊勢路を中心とした三重県エリアでも世界遺産登録後の語り部利用者数は同様に急増している。

このように、世界遺産登録後、急速に語り部の活動が活発化しており、受け入れ件数、来訪者数ともに大きな変化が生じているが、これと同時に語り部の登録者数も増えている。

こうした中で、語り部の活動形態や意義も、質的な変化につながる可能性が発生している。こうした質的な変化は以下の諸点である。

- (1) 語り部の活動状況を見ると、有償の語り部に対する需要が高いという点である。既述の通り「語り部」はボランティアガイド組織の延長として育成されたものであり、数年前までは無償であるか、はっきりした料金体系を持たない場合が多かった。来訪者の増加によって稼働状況が高まるにつれて有償化するところが増え、それに合わせて料金体系の明確化を行っている。

このような経過から、現在、語り部組織は有償のものと、無償のものが混在しているが、利用者が非常に多いのは有償の語り部、および組織である。例えば、那智勝浦町では当初「観光ボランティアの会」を組織化し、地域全体の来訪者の拡大のための活動を行っていた。その後、世界遺産登録にあわせて2004年6月に有料の「熊野・那智ガイドの会」を設

立している。その後、前者に比して、後者の方が着実に活動実績を伸ばしている。

このような現状は、同地域ではボランティアの域を超えた専門的なガイドへのニーズが高まっていることを示している。それゆえ、「語り部」が新しいビジネスとして、あるいは、一定の収入源、雇用手段として成長していく可能性を示していると言える。

ただし、有償化した語り部の場合にも、実際には稼働した際の労力に見合う程度の報酬を受け取る場合がほとんどである。そのため、専門的なガイドとして生計を営むほどの収入を生むまでになっておらず、生活の主要な収入を語り部活動でまかなうことは現状では難しい。しかし、副収入としては有望であり、さらに今後の成長が期待できるならば、新産業として成長する可能性がある。むしろ、こうした新産業への成長を視野に入れて今後の観光の振興を考える必要があるだろう。

というのも、「世界遺産」として登録されたことによって、世界からの集客が構想できるようになった。世界から評価された資源をより有効に使うことによって、観光の質を高めることができれば、こうした成長は十分に期待できると思われる。

- (2) 語り部の成長と活用は、語り部のみの問題として考えるのではなく、地域全体の観光振興との有機的な連携の下に構想される必要が生じてきている。

2004年以来、「世界遺産効果」によって急速に来訪者数がのびているものの、今後これが継続的に増加していくことは想定しにくい。今後、来訪者数は確実に登録直後よりも減ると推測される。来訪者と語り部が増大している現段階において「次の一步」を考える場合、現在の語り部の状況にも変化が必要とされることは言うまでもない。

世界遺産としての熊野古道地域の価値は単なる来訪のみによっては実感しにくい。環境的、歴史的、精神的価値は、それを正確に伝える人がいることによってより充実した形で来訪者に伝えられる。世界遺産としての登録は、単なる案内人にとどまらず、こうした価値を専門的に解説する人材の必要性を増大させている。つまり、語り部自体が貴重な観光資源なのであり、この地域の資源開発にとって重要な存在となっている。

そこで、一時的な観光客の増大による語り部の需要拡大にとらわれることなく、世界遺産としての真の価値を求める来訪者を今後拡大していくことを目指して、地域全体の観光戦略の中で語り部をどのように位置づけるかを考えなければならない段階にあると言える。

語り部の質的・量的成長のためには地域全体の来訪者が安定的に拡大していく必要があるし、逆に語り部の成長が地域全体の来訪者の増大につながる。両者は相互刺激的、相互恩恵的な関係にあるのであって、そこに好循環を創りだすことが重要となる。旅館等の地域の観光事業者、さらには観光協会等との積極的連携のもとに、地域全体の観光戦略と連動させて語り部の拡大と育成を図ることがより重要な課題になっている。

現在、田辺市本宮町などでは旅館への「出張語り部」を行うなどして双方の活動を連携させる試みが行われている。さらに望まれるのは、ツアープラン等に語り部を活用するこ

とによって地域全体の来訪者を拡大し、逆にツアープランを多様化させる中で語り部を育成していくといった相互恩恵的な仕組み作りである。例えば、外国語語り部によって外国人向けツアーを積極的に展開することによって、さらに外国人向け語り部を増やしていくといった将来ビジョンと具体的な施策が必要となる。

こうした方向へ進むためには、今後継続的に語り部自体の知識やコミュニケーション能力の向上、来訪者へのより高い満足の提供が必要とされるし、それとともに、地域への誘客を拡大する営みも必要とされるようになるだろう。語り部の育成や多様化はそれ独自で行われるのではなく、多様な語り部を積極的に活用できる周辺の能力向上と連動して開発される必要がある。そのためにも、地域の観光について全体的な構想を作り、個々の旅行商品を企画・提供できるような現地のインバウンドオペレーター能力を育成することも考えていかなければならない。

- (3) 語り部の本義は、地域の価値を来訪者に伝えることにあるのだから、語り部の専門性を高めるために、こうした知識の「収集」、「蓄積」、「整理」、「系統的な提供」、「伝承」といった機能が重要になってきている。後のアンケートで見ると、実際に語り部の声からもこうした点への要望は大きい。

これは行政、教育委員会など専門的な部署で集約的に行うべきことのように考えられるが、実際には語り部が日常的な活動の中からすでに一定のノウハウを蓄積している。それゆえ、語り部自身の知識を集約し、外部からも必要な専門的な知識の導入を行いながら、整理して提供できるような体制を整備することが課題になってくると考えられる。

今後語り部に必要とされる知識は、語り部活動の核となる「地域の歴史・文化・自然」などの知識から、コミュニケーションのための知識（コミュニケーション技術一般。外国人、バリアフリー型など多様な来訪者とのコミュニケーションを図るノウハウ）、さらには語り部を組み込んだ旅行商品の企画など観光ビジネスのノウハウ、など多方面にわたることになるだろう。そうした知識の蓄積と提供のためには、専門的な知識をもった外部の主体が必要とされる。ただし、その際にも語り部自身が知識の収集者、提供者であるとともに、利用者となれるような仕組み作りが必要になると思われる。とりわけ、地域に関わる知識と、コミュニケーション技術に関しては、語り部のこれまでの実践と専門知識を基本として、導入のあり方についての有効な枠組みを考慮する必要がある。

- (4) こうした知識の「保全」と「伝承」が、「地域づくり」の活動と表裏一体のものとして行われる必要性も認識されてきている。

先に述べたように、語り部の出発点は観光ボランティアであり、地域づくりへの参加欲求が高いところが語り部の重要な特性である。専門的な職業ガイドにとどまることなく、自発的な地域への貢献意欲が非常に高く、地域にもっと積極的に関わりたいという気持ちが語り部の活動の基盤となっている。

語り部の継承を考える場合にも、地域づくりが重要な課題となる。地域内で世界遺産の価値が深く認知されることによって育まれる地域意識全体の向上が次世代の語り部の育成につながっていくからである。知識の伝承にとどまらず、地域アイデンティティーの確立と伝承が語り部の継承にとって重要なのである。

それゆえ、語り部の意欲と能力は積極的に地域づくりに活用すべきものであり、こうした地域の自負と誇りによって醸成される独自性が観光地としての魅力をさらに高めることになる。語り部の活動を来訪者向けのサービス提供にとどめるのではなく、世界遺産の知識や価値を地域内に浸透させ、地域住民の深い理解にもとづく「世界遺産地域」を創出していくためにも語り部の役割は重要である。

上で述べたような歴史や文化についてのより深い知識の発掘、集積、伝承とともに、道としての古道そのものの保全においてもパトロール機能、外部からのサポーターを集める機能などにおいても語り部の役割は大きい。語り部が来訪者に伝える地域のアイデンティティーは、地域内の住民にとっても、地域を支えるサポーターにとってもアイデンティティーとなるものなのである。

以上、語り部の現状を全体的な状況の中から概観してきた。

一方では、来訪者の拡大によって本格的なプロ化・ビジネス化への可能性を期待させながら、語り部自身が貴重な観光資源として地域の魅力をより拡大し、さらなる来訪者の拡大につながる可能性を示している。こうした循環を創り出すためには、安定的に来訪者の拡大を可能にする全体的な仕組みとともに、それと連携させながら語り部自身の魅力を向上させていく必要がある。このことは、地域全体の観光振興、観光戦略の核として語り部の存在を考える必要があることを示している。

他方で、語り部の活動は地域の知識・地域の魅力と密接に結びついており、彼・彼女らの知識とノウハウは、専門的な知識をさらに導入しながら蓄積、提供される必要がある。こうした活動を地域づくりと連携して行うことで、地域アイデンティティーを確立し、地域の価値を伝承していくことが可能である。このことは「地域づくり」の核として語り部の存在を考える必要があることを示している。

このように「語り部」は世界遺産の活用（による経済効果の拡大）と、地域資源、地域社会の保全・伝承の双方を結ぶ核になっている。こうした語り部の独自性は今後の世界遺産のあり方にとって極めて重要な存在となる。その特性が失われないように、発展的に育成、拡大していく必要がある。

第2章. 語り部へのアンケート調査

前章では語り部の現状を全体的な状況の中から把握し、今後の発展の方向について考察した。

本章では、語り部の現状を語り部自身の認識から把握するために、アンケート調査をもとに考察を進める。

本アンケートは2006年1月から2月にかけて行われたものであり、アンケートの送付対象者は世界遺産登録地域で活動する「語り部」516名である。各市町村で語り部の窓口になっている担当機関（市町村の当該行政部局、または観光協会）を通じて配布、回収を行った。送付数から回収数260件（回収率 50.4%）を得た。

アンケートの結果については、別項にまとめて表示する（P89からP108）。本章ではそれぞれの項目から読み取ることができる語り部の現状について述べていく。以下、別項のアンケート結果を随時参照いただきたい。

アンケート項目1：性別 2：年齢

語り部には高齢者が多い。特に退職後年齢に相当する60歳以上の割合が高い。また、この層では男性の比率が高い。最近では50歳以下の層も増えてきており、この層では男女の比率がほぼ半々になっている。

語り部に高齢者が多いことには、相応の理由があると考えられる。推測しうる理由は、

- ① 地域全体が高齢者化しており、必然的に語り部の場合にも高齢層が中心になっている。
- ② 語り部として活動する時間的、職業的余裕を持てるのが高齢者層になっている。
- ③ 語り部としての知識を有する層が高齢者層となっている（若年層は地域のことを語れるだけの知識を持っていない場合が多い）。

こうした理由は、今後若年層の後継者を育成する場合に考慮すべき点を示している。つまり、若手の育成のためには、

- ① 若年層に地域の知識を普及、伝承するための学習の機会を増やすとともに、知識伝承の体系的なシステムの構築を考慮する必要がある。
- ② 語り部を行う余裕がある若年層の育成を図る必要がある。つまり、語り部を主要な収入源とできる体制を整備する必要がある。
- ③ 地域に若年層の定住を促す必要がある。

といった諸点を考慮しなければならない。語り部の育成、継承の基盤として広く地域づくりが必要とされていることが、こうした点からも見て取れる。

アンケート項目3：語り部をされてどれくらいですか。

語り部の稼働年数では、「5年以上」と「1～2年」の階層が多い。これは、先に触れたよ

うに、1999年の南紀熊野体験博覧会と東紀州体験フェスタが世界遺産登録に先行して語り部の育成、拡大に大きな役割を果たしたことと、2004年の世界遺産登録が語り部増大の契機になっていることを示している。

アンケート項目4：どのような思いから語り部をされていますか。（複数回答可）

語り部としての活動を行う理由として、

- ① 地域の歴史や文化を学びたい
- ② 人との出会い
- ③ 「紀伊山地の霊場と参詣道」を多くの人に知ってもらいたい

という3つの理由が、他の項目よりも圧倒的に多い。つまり、「地域についての学習」「来訪者との交流」「地域の魅力を伝える」という理由が上位をしめている。これを別な角度から言えば、自分たちの地域を通じた学習、交流といった「自己実現」、または地域活性化や「地域づくりへ欲求」が中心的な理由となっている。

これに対して、「収入」を理由にあげる人は少ない。これは、語り部としての収入がそれなりに発生するようになったのがつい最近のことであり、また、現状では金銭的にそれほど多くないという事情もあると思われる。しかし、上の結果とあわせて考えると、そういった理由よりも語り部がボランティアベースでの活動を基本としているという理由が大きいと推察される。

アンケート項目5：語り部について今後必要だと思われるものはなんですか。（複数回答可）

- ① より深い知識の習得
- ② 語り部としての接客技術の向上
- ③ 次世代の育成
- ④ 地域に住む住民への知識の普及

が上位を占めている。これは、上記項目4の「思い」に対応しており、「自己実現」「地域づくり」のさらなる拡充が今後の課題として認識されている。こうした要望を別の言葉でまとめると、以下の2点が今後の課題であることを示している。

- 1. 「語り部自身の向上」－ 自らの深い知識の習得を望むとともに、交流機会の拡大のための技術の向上が望まれている。
- 2. 「地域内への知識の拡大と伝承」－ 次世代の育成や地域内への知識の普及が今後必要と考えられている。

アンケート項目6：語り部の活動についてお聞かせください。（自由記入）

アンケート項目7:語り部を続けていくために必要な支援があればお書きください。(それぞれの上位項目)

上、2項目については結果における自由記述を参考にさせていただきたい。

以上のアンケート結果から語り部の現状について考察すると、以下のようにまとめることが出来る。

- ① 「地域のことを知りたい」という理由から語り部活動に参加している人が多く、こうした学習機会への要望が非常に高い。
- ② 交流を楽しむ気持ちがベースにあり、そうしたコミュニケーションに必要とされる知識と技術を向上させたいという要望が高い。
- ③ 地域内での学習機会をより拡大したいと考えており、地域内への知識の浸透とともに、次世代の語り部の育成、知識の伝承が望まれている。
- ④ 来訪者の拡大によって、地域の価値を多くの人に知ってもらうとともに、経済的な意味でも地域の活性化が望まれている。

こうした語り部の現状を、「活動動機」と「今後の要望」を中心に项目的に整理すると、以下のような図にまとめることができる。

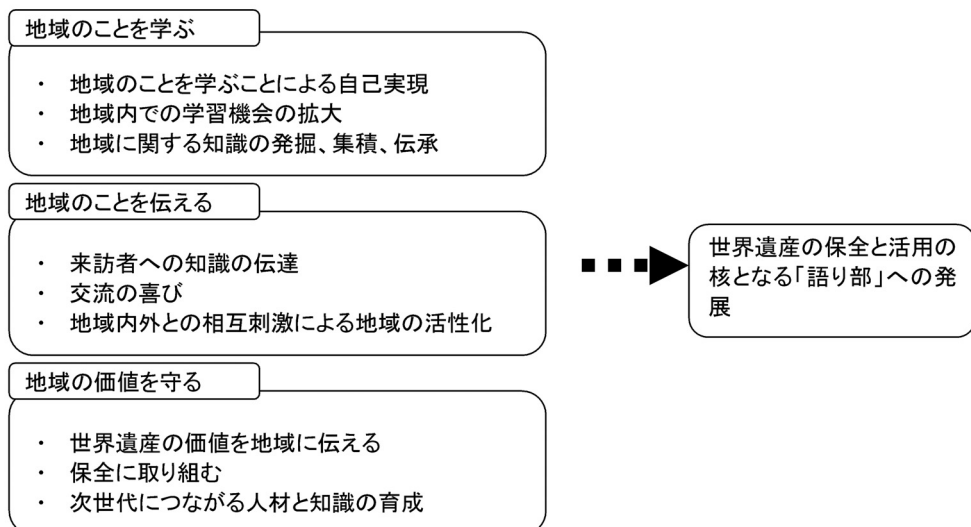


図1 語り部の意識と活動の現状

こうした結果は、語り部自身の認識からも、その存在が世界遺産地域の「保全」と「活用」の核になり得ることを示している。

語り部の特徴は、「自己実現欲求」と「地域づくりへの貢献意欲」が一体化している点にある。それゆえ、「学ぶ」「伝える」「守る」という各項目は、語り部自身の要望でありながら、それが世界遺産としての地域の価値を保全する活動と表裏一体の関係にある。「活用」についても、個人的な収益の拡大という次元ではなく、地域全体の活性化という点から望まれている。地域の中で自己を実現し、その自己実現を通じて世界遺産地域をより良いものにしていくことを語り部は望んでいる。

持続可能な観光の展開にとって、この一体関係は極めて望ましいものと言える。こうした語り部の特性を維持しながら、語り部の持つ特性を拡大、育成することが世界遺産地域の観光振興において非常に重要な点となる。

第3章 語り部の今後についての若干の考察

3-1. 語り部の今後の方向

これまでの2章で述べたように、語り部は世界遺産の「保全」と「活用」の双方に重要な役割を果たしうる存在である。第一章で考察した全体状況と、第二章で確認された語り部自身の認識と意欲を組み合わせながら、世界遺産地域における「持続可能な観光」の展開が可能になる方向性について構想する必要がある。本章では、その点について考察する。

前章でまとめた語り部の現状を活かしながら、今後その活動を進化・深化させていくためには、以下のような方向が考えられる。

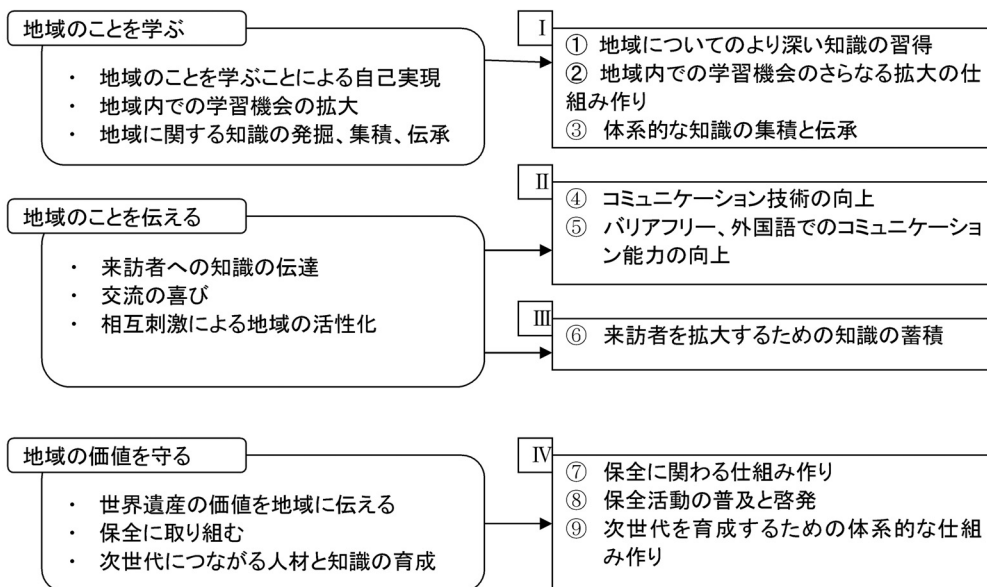


図2 語り部の発展の可能性

上記のI～IVについて、今後必要とされる知識、技術、育成システムについて検討していく。

3-2. 「地域のことを学ぶ」からの発展（図2の□）

語り部は地域への学習意欲が非常に高く、ガイド機能の高度化のためにもこうした地域の知識を体系的に提供できる仕組みづくりが必要とされる。

そのためには、

- ① より深い知識の習得
- ② 地域内での学習機会のさらなる拡大
- ③ 体系的な知識の集積と伝承

の3方向での仕組みが必要になるだろう。それぞれについて、さらに具体的なあり方についていくつかの試案を述べる。

① より深い知識の習得

世界遺産地域についてのより深い知識の習得機会を提供するために、当該地域の知識の保存庫を造る必要がある。そのためには、

- ・ 高野熊野地域の様々な文献を集積するとともに、多くの人が閲覧可能な文書庫
- ・ 高野熊野地域の研究を行っている研究者（研究機関所属、民間研究者双方を含む）の人材バンク化とネットワークづくり
- ・ 自然、植生や、地球規模での世界遺産、など関連知識についての情報を確実に利用できる情報ステーションの構築

が必要とされる。

② 地域内での学習機会のさらなる拡大

- ・ 世界遺産検定等の検定システムを作り、地域学習への意欲を高めること
- ・ 地域の一般住民、および就学生を対象とした生涯学習型の学習システムの構築
- ・ 観光と融合した、交流機会の拡大

が考えられる

③ 体系的な知識の集積と伝承

上記の「深い知識の習得」のための仕組みとならんで、体系的に整理し、世代を超えて利用可能なものとする仕組みが必要とされる。

- ・ 学芸員等の配置による知識の整理
- ・ 世代を超えて伝承するための口伝等、世代間交流を図る場の設定
- ・ 熊野地域での一定期間の実技研修、居住を含む体験型伝承システムの整備

3-3. 「地域のことを伝える」からの発展－その1（図2の□）

地域のことを伝えることが語り部本来の役割であるが、今後その能力のさらなる向上が必要となる。コミュニケーション技術を習得することで、的確に伝えるノウハウを向上させることはもちろん必要である。

さらに、それと並んで重要なのは、「語り部」の多様化である。古来、熊野の地は貴賤を問わず「分け隔てなくすべての人を受け入れる」ことを大きな特徴とし、そうであればこそ大きな信仰心の対象となってきた。これは熊野の誇るべき伝統である。

こうした熊野の精神は現代的に言えば、「ユニバーサル」「バリアフリー」と表現でき、21世紀の観光のキーワードである。すでに1000年間もこうした営みを続けてきた熊野であればこそ、その精神を現代に継承するためにも、多様な人を的確に受け入れる語り部の育成が望まれる。

そのためには、

④ コミュニケーション技術の向上

- ・コミュニケーション学、あるいは表現教育等の導入による技術の向上
- ・上の基礎的な知識を普及させるための検定、あるいは講習会の開催
- ・実地研修によるコミュニケーション技術の習得

⑤ バリアフリー、外国語など多様なコミュニケーション技術の向上

- ・手話等、多様なコミュニケーション技術の習得機会の提供
- ・要介護者等の現地への誘導技術の向上
- ・外国語ガイド育成システムと外国語に触れる機会の向上
- ・外国の文化への理解、外国人来訪者とのコミュニケーションの基礎知識の提供
- ・入門レベルでの外国語講習の実施

などが必要となる。

3-4. 「地域のことを伝える」からの発展－その2（図2の□）

語り部自身が保有すべき知識ではないが、地域内にビジネスとしての観光の知識を蓄積し、語り部を有効に活用するための人材を育成する必要がある。つまり、

⑥ 来訪者を拡大するための知識の習得

ビジネスとしての観光についての知識を地域で保有することは、今後の観光振興の最重要課題であり、インバウンドオペレーターをはじめ、地域内での新規観光ビジネス事業者を育成することも極めて重要である。

観光事業の振興のために必要とされるビジネス上の知識は多岐にわたるが、体系的に学習する機会とともに、現地の事業者にとって有用な基礎的知識の習得機会を創出することが望まれる。

- ・ 観光ビジネスについての基礎知識の提供
- ・ 観光商品の企画、立案を行う知識の提供
- ・ 来訪者の受け入れ、オペレーションを行う能力の育成
- ・ 観光戦略全体を作り出せる知識の育成
- ・ 観光プランニングに関する知識
- ・ 観光マーケティングに関する知識
- ・ 観光事業を行っていくために必要なビジネス上の知識

が必要とされる。

こうした知識は、観光に関する専門的なビジネス学習課程で教えられるべきものかも知れない。そうであればこそ、より積極的な外部知識の導入が求められる分野であるといえる。ただし、外部からのビジネスノウハウを地域に押しつけるのではなく、地域資源の現状、さらには地域社会の今後の方向性を体现し、具体化できる形でこうしたノウハウの利用が図られなければならない。

3-5. 「地域の価値を守る」からの発展（図2の□）

語り部の重要性は、その存在が保全に関しても積極的な役割を果たす点にある。世界遺産地域は、当然のことながら保全の対象地域であり、その最終的な責任は行政が果たさなければならない。

しかし、保全活動は地域全体で行う必要がある。それは、文化遺産の保全は地域住民の協力なしには行われ得ないという根本的な理由もあるが、語り部の主体性を積極的に活かすことでより良い保全の形が実現できるという積極的な理由によるものである。

こうした保全のあり方を実現するためには、

- ⑦ 保全に関わる仕組み作り
- ⑧ 保全活動の普及と啓発
- ⑨ 次世代を育成するための体系的な仕組み作り

が必要となる。

⑧⑨において語り部が果たす役割が重要であることはすでに述べた。語り部は地域内に対しても「語り部」であり、地域づくりに大きな役割を期待できる。

その上で、道はもちろん、地域のアイデンティティーや知識の伝承を含めたトータルな保全の仕組みを構想する必要がある。こうした仕組みについての調査、研究は今後の課題としたい。

第4章 語り部の育成システムの現状と課題

4-1. 和歌山県主催における語り部養成講座

「紀伊山地の霊場と参詣道」が、2004年7月に世界遺産として登録されたことを受け、熊野古道や高野山町石道を歩く各地からの観光客が増加することが予想された。そこで、和歌山県では「語り部」の新規養成を目指し、語り部養成講座を実施した。

それまで「語り部」の育成は、主に市町村及び有志の団体による独自の取り組みが行われてきており、その自助努力に依存していた。しかし、今回の世界遺産登録が広域的であること、地元単位での受講者募集には限界があること、語り部の不足が地元の実感としてあったこと等から、初めて県として広域的な募集を行い、「語り部」養成を図ることとなった。和歌山県観光局観光交流課が代表となり、旧中辺路町、旧本宮町、旧熊野川町、九度山町、高野山町、那智勝浦町、かつらぎ町の各役場及び、各地域の振興局が連携して開催される運びとなった。

(1) 養成を図ったエリア

世界遺産登録された参詣道のうち、観光客のガイド需要の増大が予想された次のルートを対象エリアとした。

- ア 中辺路（滝尻王子～三越峠）（以下、「中辺路」という。）
- イ 中辺路（三越峠～本宮大社周辺～小雲取越）（以下、「本宮大社周辺」という。）
- ウ 中辺路（大雲取越）（以下、「大雲取越」という。）
- エ 高野山町石道

(2) 応募要件

資格、年齢、性別は問わず、各ルート20名程度の募集を行った。ただし、観光客のガイドに従事できる者の養成を目指すため、修了後は各町の語り部組織等に属し、実際に活動できる者に限定した。

(3) 応募者数

ア 中辺路	34名	
イ 本宮大社周辺	20名	
ウ 大雲取越	19名	
エ 高野山町石道	54名	計 127名

(4) 講座内容

- ア 共通カリキュラム（観光ガイドに係る基礎知識の講義）

(第1回)

1 講演 良き観光ガイドを目指して

静岡県観光ボランティアガイド連絡協議会会長 齋藤静雄氏

2 講演 熊野古道について

藤白神社宮司（紀州語り部の会代表世話人）吉田昌生氏

(第2回)

安全管理について

講師 本宮町消防本部 救急救命士（中辺路3ルート）

伊都消防組合消防本部 救急救命士（高野山町石道ルート）

(第3回)

1 講演 世界遺産登録について 県世界遺産登録推進室 小田誠太郎氏

2 講演 豊かな紀州のやま 県森林審議会委員 真砂典明氏

3 講演 和歌山の語り部として 紀州語り部の会代表世話人 中瀬喜陽氏

イ ルートカリキュラム（ルート毎の講義及び現地研修）

① 中辺路

	研 修 内 容
1	講義及び実地研修：滝尻王子～高原神社
2	講義
3	実地研修：高原神社～道の駅
4	講義
5	実地研修：道の駅～小広
6	講義
7	実地研修：小広～三越峠
8	意見交換会

② 本宮大社周辺

	研 修 内 容
1	室内講義（熊野信仰、参詣道の歴史、中辺路の解説）
2	室内講義（熊野信仰、参詣道の歴史、中辺路の解説）
3	現地研修：発心門王子～本宮大社周辺
4	現地研修：発心門王子～本宮大社周辺
5	室内講義（雲取ルート、伊勢路、奥駈道、小辺路等解説）
6	室内講義（雲取ルート、伊勢路、奥駈道、小辺路等解説）
7	現地研修：小雲取越
8	現地研修：小雲取越
9	アシスタント研修

③ 大雲取越

	研 修 内 容
1	室内講義（木村靖先生）
2	室内講義（木村靖先生）
3	室内講義（萩原重夫先生・杉浦郁代先生）
4	現地研修 大雲取越（萩原重夫先生）
5	現地研修 小雲取越（萩原重夫先生）

④ 高野山町石道

	研 修 内 容
1	室内講義（高野山町石道とは）及び現地研修（高野山内）
2	現地研修（慈尊院～丹生都比売神社）
3	現地研修（丹生都比売神社～大門）

(5) 修了者数と現況

養成講座は2004年6月から10月にかけて各地で行われた。その修了者数とデビューした「語り部」の人数、及び、世界遺産登録から一年経過した2005年7月における「語り部」の活動者数を表に示す。

組 織	受講者数	修了者数	修了後の デビュー数	元々団体に いた人数 (2004.7)	養成講座 以外から の 増 減	合 計 活動者数 (2005.7)	養成率
中 辺 路	34	22	6	11	+ 1	18	33%
本 宮	20	19	9	15	+ 12	36	25%
大雲取越	19	16	15			15	100%
町 石 道	54	49	13			13	100%
計	127	106	43				
デビュー／受講			34%				
デビュー／修了			41%				

4-2. 和歌山県の各団体における語り部育成の現状

県主催の語り部養成講座が修了した後に、新入会した人に対しては、各団体が独自で語り部育成を行っている。新入会のあった団体における「語り部」デビューまでの研修方法ならびに合格基準は以下の表の通りである。

また、「デビュー後の日常的な研修」に関しては元々の「語り部」とともに行っているものである。

世界遺産地域における「語り部」の現状と今後の課題

地 域	団 体 名	語り部デビューに至るまでの研修	デビュー後の日常的な研修
中辺路町	NPO法人 漂探古道	座学（4回）、実地（4回）の研修の後、先輩語り部についてお客さん案内を勉強（3回）。その後、研修部長や役員についてもらい、案内のチェックを受け、合格が出れば語り部としてデビュー。	毎月行う定例会（意見交換や日程確認など）および勉強会。実地研修として、古道歩き・京都の城南宮見学・十津川研修など。講習会として、様々な先生も招いている。
本宮町	本宮町語り部の会	講義ののち、坂本先生について3回ほど歩く。その後、先輩について歩くアシスタント研修（最低3回）を行い、各回報告書を書いて提出。自信がついた時点でデビュー申請書を書き、役員と一緒に歩きながらチェックを受ける。合格になれば語り部デビュー。	定例会の実施と各種研修会・講習会への参加。
那智勝浦町	熊野・那智ガイドの会	役場の中に作られた無償の那智勝浦町観光ボランティアガイドの会で、まかなえない部分を観光協会で補う形で結成。数名をボランティアガイドから引き抜き、その人たちが講師となって新人を教えた。講義→現場→本番という流れはあるが、規定はなくてもデビューできる。もと旅館スタッフやバスガイド、伊勢のガイドなど経験者が多く、案内業に慣れている。	2ヶ月に1回の勉強会と近辺で行われるウォーキングに参加することで互いの向上を図る。

4－3. 三重県における語り部育成

三重県では、「東紀州体験フェスタ」の開催（1999年）とともに伊勢路を中心とした語り部の組織化が進められた。これは三重県の東紀州活性化協議会の主導で行われ、「熊野古道語り部友の会」が結成された。現在、三重県の語り部組織は、「熊野古道伊勢路語り部友の会」に一元化されているが、活動範囲は峠ごとの登録となる。

組織発足当初は、講習を行い、それを履修したものであれば誰でも「語り部」としてデビューできるという仕組みだったが、現在は多少のステップを加えている。

三重県主催で、年に数回行う講習・研修を受け、理解の深まりを各自が判断できた段階で、3回程度先輩について歩き、勉強をする。自信がついたら県に申請し、峠ごとにデビューの許可が下りる。講習・研修の履修必須回数は決まっておらず、先輩と歩く回数も目安である。第三者が判断を下す、あるいは、何らかの基準を設けているのではなく、あくまでも自己判断によるものであることも特記したい。

4－4. 語り部育成の課題

「語り部」組織の運営は地域によって様々であるが、今後の発展性と地域への貢献に大いに期待したい。そこで、上記の育成状況を踏まえ、考えられる今後の課題を三点挙げ、以下に説明を加える。

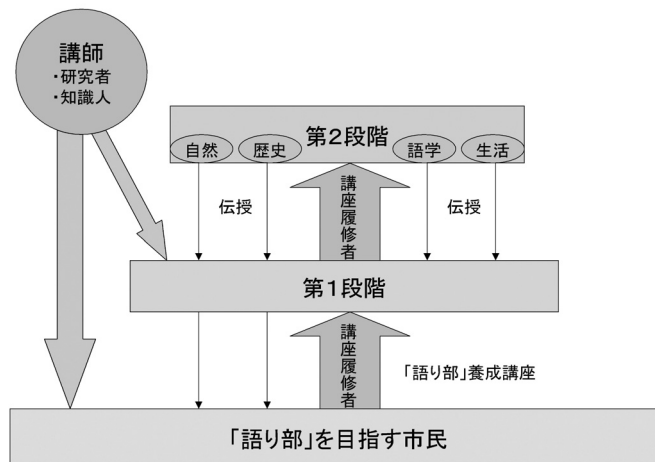
- (1) 各県および世界遺産登録三県合同主催による語り部育成と交流
- (2) 一元化した語り部育成から得意分野への発展
- (3) 次世代の育成

(1) 各県および世界遺産登録三県合同主催による語り部育成と交流

現在の「語り部」組織（特に和歌山県）は、各団体が町村との連携により、独自の運営を行っている。団体・町村の特徴や売りが観光客の呼び込みには必要となってくるが、訪れる人にとってはあくまでも『世界遺産の熊野』という位置づけである。県内および三県合同でひとつの目標を掲げ、今後の方向性の目安を話し合っていくことが大切だと考える。県と各団体の連絡を密にし、情報を提供していくこと、また、団体間での交流の場を積極的に設け、自分たちの団体の見直し・向上に努め、互いの特徴を尊重しあうことやすり合わせていくことも語り部育成の重要な要素になり得る。

(2) 一元化した語り部育成から得意分野への発展

すでに述べたとおり、和歌山県・三重県では県主催の「語り部」育成の研修会・講座が幾度にも渡り行われてきた。現在、これらの研修会を修了し、「語り部」として活躍している人が数多く存在する中で、今後の課題は、それらの「語り部」の得意分野を生かすことである。歴史、動植物、地域の生活、外国語などの知識をさらに深め、一定の講習を受けた者の更なるステップを設けることが自身の向上および観光客の関心の深まりにつながる。「語り部+α」を推進し、第1段階を修了した者が第2段階へ進めて自信をつけられる仕組みがあると全体の向上にもなる。またステップアップした「語り部」による知識伝授のシステム作りを行うことも、全体の意識の高まりにつながると考える。



(3) 次世代の育成

現在「語り部」として活躍する人の8割近くが50歳以上である。今後長期的に「語り部」の発展を考えるに当たり、次世代の育成が必須条件となる。若手の参画が難しい理由

とその対応策は、前述しているが（第2章 アンケート項目1、2）、ここでも育成に関しての具体策を考えたい。

大切なことは、地元に誇りを持つ人たちの裾野を広げ、育成していくことである。現在、遠足で熊野古道を歩く地元の小中学校もあり、その際に学校職員と歩くだけのところもあるが、「語り部」も一緒に歩くことを勧める。ハイキングとしてではなく、自分たちの暮らす地域に悠久のロマンを秘めた道があり、世界に誇るべきものであるということを「語り部」が伝え、子供たちが知る機会を設けてほしい。そして、総合学習の時間などを利用した職業体験にも「語り部」を取り入れたり、地元パンフレット作り、ホームページ作り、海外の学生との文通・メール交換などを通じて自分たちの暮らす地域をより深く知り、伝えてもらいたいと考える。そうすれば、今度は日本各地・世界各地を訪れる際に自信を持って地域のことを伝えることができ、現代の熊野比丘尼として活躍できる。

若手の育成は、歴史だけにとらわれず、動物や草花、遊び、体験活動など自由な発想によるものにし、高校生・大学生のボランティアにも参加してもらうことも大事である。現在活躍する「語り部」から高校生・大学生へと伝え、若手に噛み砕いてもらったものを、小・中学生へ伝えることもひとつの方法として考えられる。

今後は海外からの観光客の増加も見込むと、若手の参画も必要になるだろう。歴史ある熊野古道に新たな発想も加えながら、次の時代へ順々に受け継いでいく努力が必要である。

おわりに

本文中でも述べたが、世界遺産登録までの一連の経過の中で、いくつかの幸運とタイミングの良さが重なって、語り部は育成され、発展してきた。1999年の「熊博」や「体験フェスタ」の段階では、世界遺産登録はそれほど現実的なものではなかった。しかし、その段階で語り部の発掘、育成が行われたことが、登録後の語り部の活躍につながっている。

本稿は、世界遺産登録後の段階に立って、その「保全」の「活用」を展望する中で、語り部の現状とこれからの姿について調査、検討したものである。

世界遺産登録直後の来訪者の拡大の中で「語り部」の重要性がクローズアップされたことが、次のステップを示してくれる。今後真に充実した世界遺産として発展していくためには、語り部が重要な役割を果たすことが期待されるのであり、語り部自身のさらなる発展が必要とされている。

さらなる発展のためには、行政、調査研究機関、旅行事業者など外部の専門知識の導入を充実していく必要がある。しかし、そうした外部からの協力が、「押しつけ」にならないためにも語り部、および地域住民の主体性が不可欠である。具体的な仕組み作りは地域の思いを生かす形で構築されるべきであり、そういう意味からも語り部の今後に期待したい。

「語り部」へのアンケート項目

※和歌山大学「語り部アンケート調査」2006より

- 1、性別 ・男 ・女
- 2、年齢 ・10歳未満 ・10代 ・20代 ・30代 ・40代 ・50代
・60代 ・70歳以上
- 3、語り部をされてどれくらいですか。
・1年未満 ・1～2年 ・2～3年 ・3～4年 ・4～5年 ・5年以上
- 4、どのような思いから語り部をされていますか。(複数回答可)
・『紀伊山地の霊場と参詣道』を多くの人に知ってもらいたい ・人との出会い
・屋外活動で汗を流したい ・空き時間を有効に利用したい ・収入源として
・地域の歴史や文化を学びたい ・その他 ()
- 5、語り部について今後必要だと思われるものはなんですか。(複数回答可)
・活動拠点の整備 ・活動組織の整備 ・財政的な自立化
・受け入れ窓口、手配の自前化 ・有料ガイドの拡大
・無償のボランティアガイドの拡大 ・より深い知識の習得
・語り部の接客技術の向上 ・次世代の育成 ・外国語ガイドの育成
・エコツアーガイドの育成 ・ガイドできる地域の拡大
・地域住民への知識普及 ・地元の旅館等の観光事業者との連携の強化
・行政との連携の強化
- 6、語り部の活動についてお聞かせください。
① 活動をしていて良いと感じる点
② 活動をしていく上での問題点
- 7、語り部を続けていくために必要な支援があればお書きください。
- 8、現在、京都検定のような「ご当地検定」の取り組みが各地で行われています。
世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の検定があれば、受けてみたいと思いますか？
・思う ・思わない よく分からない
→「思う」「思わない」について理由をお書きください。
- 9、その他、ご意見などございましたらご自由にお聞かせください。

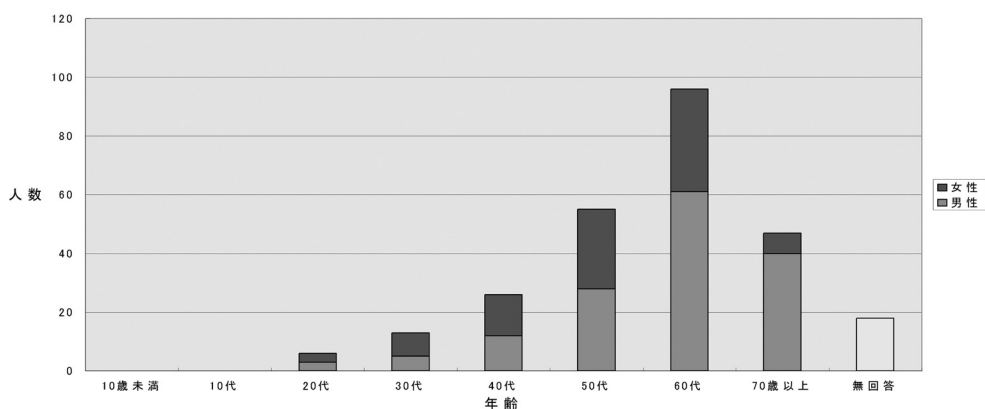
「語り部」へのアンケート結果

対象者：世界遺産登録地域の語り部 516名

回収数：260件（回収率 50.4%）

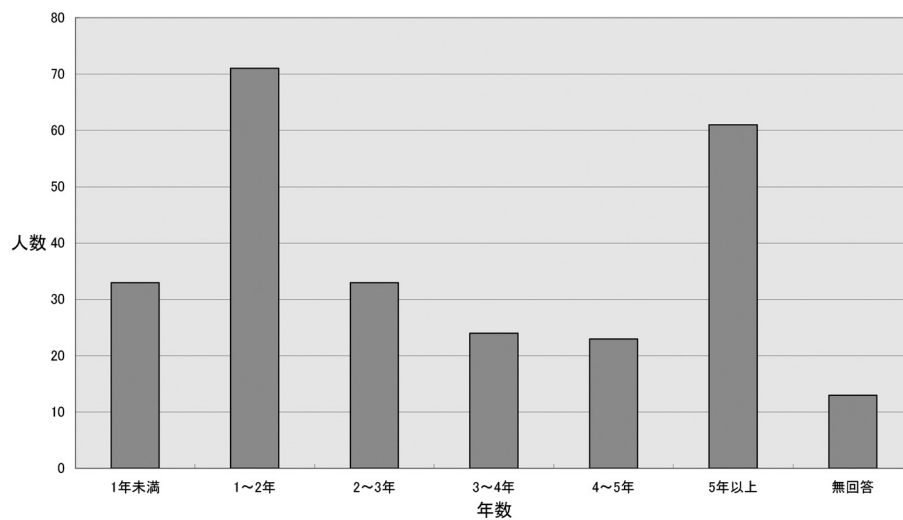
1、性別 2、年齢

性別と年齢

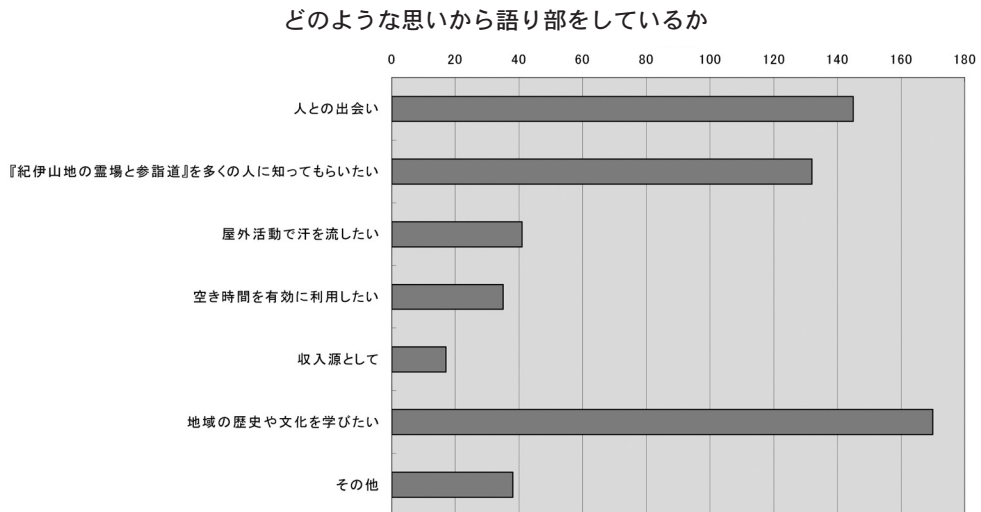


3、語り部をされてどれくらいですか。

語り部経験年数



4、どのような思いから語り部をされていますか。（複数回答可）



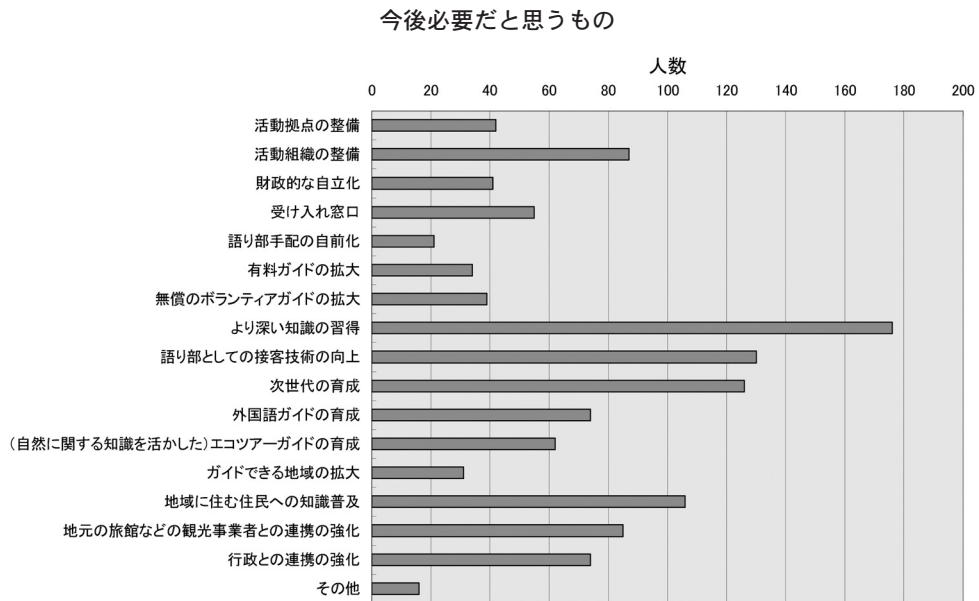
その他の意見

- ・地元活性化のための交流・貢献（5名）
- ・山歩きや自然がすき（3名）
- ・地域のすばらしさを伝えたい（3名）
- ・地域PRのため（2名）
- ・興味が高じて（2名）
- ・世の中の役に立ちたい、ボランティアがしたい（2名）
- ・自分を高めるため（2名）
- ・健康維持（2名）
- ・地域の勉強をしたい（2名）
- ・知人に勧められて（2名）
- ・自分で調べたことを生かしたい（2名）
- ・先輩に教えてもらったものを次の人に伝えたい
- ・訪れた人に思い出を持って帰ってほしい、感動してほしい
- ・熊野古道の保存、継承に協力したい
- ・観光資源の発掘
- ・生まれ育った土地に人々が喜んできてくれるから
- ・山村、森林のことを伝えたい
- ・話がしたい
- ・自然の大切さ、熊野の森を守っていくことを伝えたい

世界遺産地域における「語り部」の現状と今後の課題

- ・ネイチャーガイドや自然観察指導員の会員になっているため
- ・仕事で担当した関係で登録していて、自分の意思ではない

5、語り部について今後必要だと思われるものはなんですか。（複数回答可）



その他の意見

- ・広報活動（4名）
- ・地域格差の是正
- ・古道整備
- ・パンフ作成
- ・養成講座の継続
- ・行政以外のいろんな人との交わり
- ・片言の英語
- ・周辺地域を含めたガイドの育成
- ・他地域の語り部との交流
- ・古道だけでなく街中、文化、建築のプロフェッショナルなガイド（その養成）
- ・外国語による出版物（ガイドブックなど）
- ・世界遺産の維持、整備のための積立金
- ・行政は机上で語らずに本来の自然の知識を得るべきだ（道路、周辺の整備）
- ・ユネスコ協会との連携

6、語り部の活動についてお聞かせください。

③ 活動をしていて良いと感じる点

- ・全国各地のあらゆる人との出会い、触れ合い、つながり（123名）
- ・楽しんでもらえたとき、喜んでもらえたとき、感動してもらえたとき（42名）
- ・地元の歴史や文化を勉強して、良さを知ったり再認識したりできること（42名）
- ・訪れた人に地域の歴史などを知ってもらえること、伝えられること（30名）
- ・勉強する意欲が湧き、向上心が持てること（19名）
- ・健康維持につながる（15名）
- ・お客さんの住む地方のことを教えてもらったり自分の知らない地方のことを教えてもらえる（14名）
- ・（語り部同士）互いに勉強しあえる人とのめぐりあい（9名）
- ・まだ（活動をしていないので）よく分からない（7名）
- ・話を聞いてもらい、語り部に付いてもらってよかったと言ってもらえたとき（7名）
- ・もう一度来たいと言われたとき（7名）
- ・同じ道でも歩く度に違った魅力を発見できること（5名）
- ・生涯学習の場であり、生き甲斐になっている（5名）
- ・自然と触れ合うことができる（5名）
- ・地域の活性化に役立てること（4名）
- ・退職後の自由時間が充実している（3名）
- ・自分の頭と体が活性化される（3名）
- ・お客さんに感謝されたとき（3名）
- ・お客さんに説明をすることで自分も学ぶことがある（4名）
- ・プラス思考になった、自分に自信が持てるようになった（2名）
- ・笑顔で別れるとき（2名）
- ・楽しんでもらえた方にもう一度指名してもらえた（2名）
- ・お客さんに感動や元気をもらっている（2名）
- ・都会から来たお客さんに自然のすばらしさや山村の文化、生活を実感してもらえること（2名）
- ・地域の人たちとの触れ合い（2名）
- ・お礼の手紙をもらったとき（2名）
- ・地域の実状が分かるようになったこと
- ・人との交流がうまくできるようになった
- ・講師としての実感が湧く
- ・語り部の組織が、地域への誇りを持つ人を増やし、あらゆる世代の社会参加の受け皿

となっている点

- ・参加される方々のマナーのよさに日本人のよさを感じる
- ・地元の人に古道へ来るお客さんの現状を伝えることができ、普段の生活でも張り合いが出た
- ・歩くことが好きになった
- ・趣味が実益につながる
- ・歴史、文化、ニュースに敏感になった
- ・参詣道の価値を守ってくれた人に感謝したい
- ・自分自身、四季の移ろいなどを感じながら古道散策を楽しんでいる
- ・(同年代の)中年女性のパワーは日本全国どこでも全開だと感じられる人たちに会える事
- ・お客さんに語ると同時に自分もますます熊野が好きになっていること
- ・地元の住民の歴史への興味を深めることができた
- ・ボランティアの充実（特に若い人）
- ・自然を大切にする心や旅のマナーが養われていく点
- ・世界遺産になった熊野古道を（各地から来た人と）共に歩くことで日本国中に（情報を）発信できること
- ・自分の営んでいる民宿で宿泊される方に詳しい古道の説明ができること
- ・机上では味わえない感動がある
- ・日本人の平和的な心を分かってもらえたとき
- ・外国人との交流が持てること

④ 活動をしていく上での問題点

a．個人的な問題点

- ・話術、コミュニケーション、伝え方の工夫がまだ不十分（12名）
- ・仕事との両立（12名）
- ・自分の知識不足（11名）
- ・健康面（9名）
- ・時間が取れない（4名）
- ・草木の知識の習得は季節ごとに変わるので時間を要する
- ・経験不足な点
- ・仕事としてやっていくには不安定
- ・古道に難所が多く、登るので精一杯になってしまう

b．組織の問題点

- ・次世代の若い語り部の育成ができていない（22名）

- ・安全面の整備、事故をしたときの対応ができるかどうか（12名）
 - ・お客さんが少なくなっている、依頼が少ない（9名）
 - ・研修の場所と機会がほしい（8名）
 - ・語り部としての技量の格差がある（6名）
 - ・語り部同士のネットワーク作り（6名）
 - ・語り部の依頼に不公平がある（5名）
 - ・語り部の資質向上（4名）
 - ・費用の面（印刷費、車代、写真代、機材代など）（4名）
 - ・組織に対する公的な財政的支援（3名）
 - ・高齢者が多くて語り部のイメージが固まってしまっていて、新しいガイドが工夫する余地があまり残されていない、保守的である（3名）
 - ・人数不足（3名）
 - ・語り部組織の充実（2名）
 - ・会員の集う場所の充実（2名）
 - ・担当地域の不人気（2名）
 - ・リピーターの確保とその手法（2名）
 - ・語り部の高齢化（2名）
 - ・歴史中心のマニュアルではなく林業や漁業など生活としての説明も必要（2名）
 - ・世界遺産登録でガイドのニーズが増えたが、これが維持できるかどうか（2名）
 - ・有償にこだわり、ボランティア精神に欠けていること、協力してくれる人が少ないこと（2名）
 - ・語り部育成の体制が整っていない
 - ・料金体系の整備
 - ・資料の整備
 - ・語り部の存在が知られていない
 - ・無償の為、急にキャンセルされることがある
 - ・登録のみの語り部が多くいる
- c. 地域、行政に対しての問題点
- ・交通の便が悪い（13名）
 - ・古道の整備と保全（6名）
 - ・PR不足（5名）
 - ・行政、住民、語り部の結びつきが必要（3名）
 - ・森林、環境の保全（3名）
 - ・トイレが少ない（3名）

- ・ 古道に持ち込まれる商業主義（２名）
 - ・ 長期間滞在してもらえるような工夫（廉価な宿泊施設など）（２名）
 - ・ 地域住民に理解を得る（２名）
 - ・ モラルのない人々の啓発
 - ・ 食事をする場所に困る
 - ・ 行政区分毎の活動ではなく、広いエリアでの活動が望ましい
 - ・ 観光客が集中する時期の交通混雑とシャトルバスの運営、駐車券
 - ・ 携帯電話の利用のできないところが多く、緊急時が心配
 - ・ もっと魅力あるコース作りや体験、宿泊施設、名所の巡回バスサービスなど、トータル的な企画が出せるようなネットワークを作してほしい
 - ・ 案内だけでなく、地域の活性化にどうつなげていくことができるか
 - ・ 地域全体での受け入れ体制ができていないところがある（八鬼山など）
 - ・ 古道は私有地を通っているので、所有者との関係を考えてみたい
 - ・ 勉強するための情報や資料がどこにあるのか分かりにくい、インターネットで公開してほしい
 - ・ 古道の開発をしないこと、面影を昔のままに残してほしい
 - ・ 市内の観光拠点の受け入れ施設が少ない
 - ・ 広範囲になった田辺市の観光をどう連絡を取り合っていくか
 - ・ 街の中の清掃、特にトイレ掃除
 - ・ (新宮市) 全体で街を良くしていこうという動きが感じられない（飲食店、お菓子組合などは協力してくれている）
- d. 観光客、旅行者に対しての問題点
- ・ 案内時間が短いと充分な案内ができない、時間配分が難しい（12名）
 - ・ ひとりで大人数を案内すると大変（６名）
 - ・ 古道歩きの格好ではない人も来る（３名）
 - ・ 旅行会社が無理な日程を組んでいる（３名）
 - ・ 雨が降ったときの対処の仕方に困る（２名）
 - ・ 語り部の話を聞かないで１人で歩こうとするお客さんがいる
 - ・ 観光客のごみのポイ捨てや周辺の民家への立ち入り
 - ・ 山歩きのマナーを理解してもらうのが難しい場合がある（禁煙など）
 - ・ こちらが勧めるものとは違うところで興味を持つので、その文化の違いを実感する
 - ・ 途中で動けなくなった人がいて困った

7、語り部を続けていくために必要な支援があればお書きください。

a．ソフト面での支援

・講習会の開催（42名）

歴史と文化、植物、話し方の研修、救急法、現地研修、他地域に学ぶなど

現在の散発的な研修ではなく資質向上のための系統的な研修の支援

インタープリターやエコツアーの先導地からの講師を呼んでほしい

各地域での開催を希望

コンソーシアム和歌山共同公開講座で各大学の教員の視点を生かした講座を持って、知識的な面を普及してはいかがでしょうか

・PRをしてほしい（12名）

テレビCM、パンフレット配布、バス会社との連携、語り部の存在をアピールなど

・次世代の語り部育成のための支援がほしい（8名）

育成基金、新人養成、リーダー養成

・行政は定期的に質問会を開催してほしい

・情報の開示（9名）

新鮮な情報、各地域のイベント、インターネット、資料、語り部新聞、事例紹介など

・財政的な支援（8名）

研修費、組織の運営費、後継者の育成など

・行政と語り部の連携システム（8名）

・語り部、ボランティアガイド間の交流ネットワーク（6名）

・地域の人々の理解、協力（4名）

・英語、中国語の研修（3名）

・語り部組織の情報発信（3名）

インターネットのホームページがほしい

・シーズンオフ（12～2月）にも仕事が入るような仕組み、活動がほしい（3名）

・地域の活性化と共に、語り部が経済的に自立できるといい（3名）

・旅行社の企画の際に、現地に来て地元の人と話し合ってから計画を作してほしい（2名）

・現在は各地域でばらばらに運営しているが、どこかで大局的にコントロールする必要があると思う（2名）

・保険があったほうがいい（2名）

・語り部が必要なときに全員に知らせるシステム、一人の人に偏らないようにしたい（2名）

・活動の評価と改善のサイクル作り

- ・県や市町村の年間を通しての企画やイベントを増やしてほしい
- ・語り部のあるべき姿を示してほしい
- ・活動組織への理解
- ・同じ地域のグループの合併
- ・各語り部の個性を大事にして、画一的にしないような支援
- ・お客さんのアンケートから意見を聞きたい（コース、時間など）
- ・語り部は昔話をするおばあちゃんのようなイメージなので、もっと旅全体のプランナーやコーディネーターのような仕事に広げてほしい
- ・正式な観光案内の要請がきたことがないので、ほしい
- ・役場から自立するように言われて個々でやり始めたが、事故などの対応に不安
- ・地域全体で取り組むための行政の指導
- ・リピーターの確保
- ・古道周辺に住む人たち及び他地域の語り部を対象に古道を歩く会を開催したい
- ・語り部はボランティア感覚だけでは続けていけないので、仕事がほしい
- ・組織をNPO化して、行政の活動部分の受託をする
- ・3県の連携

b. ハード面での支援

- ・資料、学習施設の整備（10名）
いつでも閲覧できる状態にしてほしい、知的支援と経済的支援、映像機材、各地に設置してほしい、行政単位を超えた地図や資料の作成
- ・交通手段の整備（6名）
上り口と降り口が異なるのでその間の移動に困る
巡回マイクロバスなど
- ・活動拠点、（6名）
語り部が常駐して窓口になれるようなスペースの確保、
語り部同士の情報交換の場、ビジターセンター、
雨が降っても楽しく古道の話ができる場所
滝尻（世界遺産の入り口）に作ってほしい
- ・古道および周辺の整備（5名）
休憩場所、トイレ、案内標識、石畳（はがれている）、駐車場の確保など
トイレ設置の希望：慈尊院～高野山の間（ゴルフ場近辺）
馬越峠、始神峠などの上り口に歩道橋がないので危険
四季が感じられるような整備
- ・新しい観光商品の開発、販売、お土産屋などで語り部雇用の一助にしたい（4名）

・パンフレットの継続作成（2名）

「高野山町石道をたずねて」は今年度作成したが、来年度以降もぜひ

・マニュアルの作成

・世界遺産地域の詳細な調査

町石道の周りが畑ができています

・県や市町村からの要請による出動が度々あるが、費用が出ないので、支援してほしい

・観光協会へは十分な量のパンフレットを用意してほしい

・携帯電話のエリアを広げ、安全面を確保したい

・草刈りや掃除は、今はボランティアがやっているが今後の管理を考えてほしい（2名）

・古道の維持、修繕などにすぐに対応できる組織体制

・ユニフォーム、マイクなどの必需品の統一とその支援

・語り部の受け入れ窓口の一本化

c. その他

・支援は十分に行われていると思う（2名）

・国や県、市などの行政が汗をかいて苦勞する気概が少ない

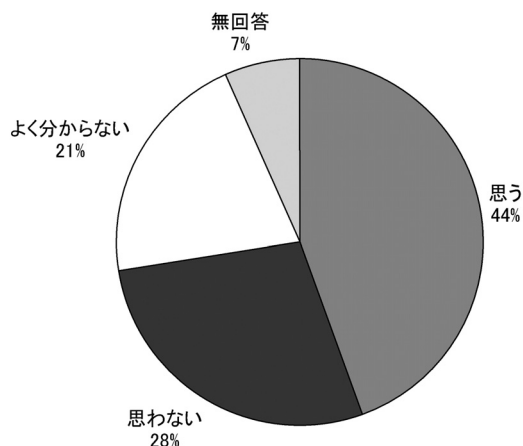
・行政観光課の積極的な支援

・行政からの専門的な人材の支援

8、現在、京都検定のような「ご当地検定」（観光業関係者や地域についての知識を高めた人たちを対象にした歴史や文化に関する知識量を試す検定試験）の取り組みが各地で行われています。

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の検定があれば、受けてみたいと思いますか？

検定があれば受けてみたいと思いますか



→「思う」と回答した人の理由

- ・知識向上のいい機会になるため（44名）
- ・一定の基準が必要（23名）
- ・自己の向上になる、目標ができる（11名）
- ・自分の知識量を試したい（9名）
- ・確信と自信を身につけたい（7名）
- ・質と信頼性を高くしたい（地元の人がなんとなくやっている活動、だけでは終わらないように）（5名）
- ・関心がより広がるのではないか（4名）
- ・話し方や接客も深めないといけない（2名）
- ・講習会を開いて、テストをするというのもいいと思う（2名）
- ・和歌山県全体となると範囲が広いので、高野町石道とその周辺に限った程度のものなら受けてみたい
- ・語り部の仲間との交流にもつながる
- ・次世代の育成方法として
- ・お客さまからお金をいただくので、自分の知識量を試してみることは必要
- ・必要だと思う
- ・賛成だが、知識偏重の語り部育成にならないように
- ・語り部の資格にはしないで、級にしたらいい
- ・英語の試験も希望
- ・誰が検定するのか、公平性が必要
- ・実地検定も必要
- ・自分が本当に熊野の人間かどうかの確認ができる
- ・研修に意欲的に参加したり、あらゆる方面にアンテナを張ろうと思える
- ・お客さんに誇りをもって接することができ、その結果リピーターが期待できる
- ・自分の知らない分野を知るきっかけになるのでいいと思うが、実施意図や形態が知識量の数値化に重きが置かれるようであれば受けたくない。その問題に応じた講演会などがあるとよいと思う。
- ・奥深さがあるので、学校の歴史テストのようにはいけないと思う
- ・アルバイト的な語り部との区別のため

→「思わない」と回答した人の理由

- ・高齢のため（9名）
- ・範囲が広いので、土地ごと地域ごとに個性があるのでそれを生かしたほうがいい（5名）
- ・まだまだ学ぶことが多いので、今の段階では受けようと思わない（4名）

- ・ 来訪者のニーズに合わせてその時々で話せることの方が大事（4名）
- ・ 必要なのは知識の量ではなく人柄や心情（3名）
- ・ 時間がない（3名）
- ・ 検定試験を受けてまでやりたくはない（3名）
- ・ 頭でっかちに定型化してしまう（2名）
- ・ 検定によってその人のやる気や意欲をなくしてしまわないか心配（2名）
- ・ 知識だけ高めるのではなく、もてなしの心を高めていきたい（2名）
- ・ 自分たちで有効な学習会を開いている（2名）
- ・ 先輩が残してくれた書物やガイドブックで勉強すれば充分（2名）
- ・ 検定試験にこだわることなくみんなで共に知識を広めて前向きに取り組む姿勢を大切にしたい
- ・ このような制度が人の本来の姿を破壊する原点、人との出会いを望むなら試験や資格制度は実施すべきではない
- ・ 各人のレベルに応じて楽しんで知識量を増やせばよい
- ・ 勉強はしたいが、いまさら検定試験は受けたくない
- ・ 観光というテーマが大きすぎるため
- ・ 勉強時間が充分に取れないので希望しない（ボランティアでもあるし）
- ・ その時々で一緒に歩く人とのやり取りを楽しんでいるため、最低限は話した方がいいが、カチカチにはしないほうがいいかと。
- ・ 京都のようにお客さんが来ないのに、検定試験のようなことばかり一生懸命になるのはどうか。
- ・ 知識を高めることは良いが、ただマニアックになるだけの自己満足で終わる気がする
- ・ メリットが感じられない
- ・ 内容による
- ・ これ以上試験を受けたくない
- ・ 経験を積めば自然と知識はついてくる
- ・ そこまでは考えていない、道案内をして楽しく帰ってもらえればよい
- ・ 語り部は個々の個性によって伝えることが肝心で、知識を伝えるものではない
- ・ 試験を受けてまでガイドをするほど依頼がこない
- ・ ガイドは楽しく旅のエスコートをするという気軽さで取り組んできているのでハードルの高い検定試験は反対だが、基本知識終了証や確認試験程度なら賛成
- ・ 語り部の格付けには賛成できない
- ・ 歴史に詳しくてもお客さんとうまくコミュニケーションが取れない語り部は結構いるから

- ・検定をやるための組織やスタッフに余分な金がかかる
- ・知識量が多い人は自らの知識を自慢しがちになることが多いが、本当はもう一度訪れてみたいとお客さんに思わせる応対が大切
- ・京都は寺院などだが、この地域は道なので、現地ならではの草木のことなどの方が魅力があると思う
- ・年齢的にも自分の力に応じたガイドをしていけばよいと考えているから
- ・個人的に関心度が違う分野なので、講習すればよい
- ・ボランティアに対して知識量の試験をするのは失礼
- ・もう少し時期を待ってからの方がいいと思う
- ・この地域は精神的、宗教的要素が強く、一律の枠で縛ることは妙である
- ・試験を受ける自信がない
- ・肩書きに縛られることに疑問を感じる

9、その他、ご意見などございましたらご自由にお聞かせください。

a . P R について

- ・語り部の活躍場所は、小・中学校、宿泊施設、神社、寺など多くあるがPRが難しい。
- ・行政にPRをもっとしてほしい
- ・串本の海のラムサール条約などももっとPRして、海と紀伊山地を多面的に取り上げて漁業、林業、農業との活性化につながればと思う
- ・関西空港、新大阪駅、難波、大阪などに、案内と物販と名物料理などの試食が可能な県直営あるいは大学直営のパイロットショップの設置
- ・“熊野”を全国的にブランド化したい。語り部も地域住民も行政も三位一体で意識向上を図り、ひとりでも多くの方々に足を運んでももらいたい
- ・現在は月に1回の依頼があるがどうか。若い人でもせっかく勉強したのに忘れてしまいそう、と言っている。もっと観光業者に熊野へ来てもらえるよう宣伝してほしい。案内することが勉強につながるから。
- ・ガイドとしてお高くとまるのではなく、親しみの持てるような文章で宣伝して既成概念を取り払うべき。各語り部の特徴や強みを前面に打ち出すようなPR文章と顔写真。

b . 講演会の要望・意見

- ・勉強会や研修会を多く行ってほしい
- ・語り部は基本的に歴史や文化の知識は必要だが、それをお客さんに一方的に伝えるのではなく、ユーモアを交えるなど、心をつかむ努力が必要。そのための接客講座などを定期的を開いてほしい
- ・語り部は学芸員ではない。リピーターを増やすには、お客さんに喜んでもらい、出会

いを大切にすることだと思う。知識や話術の向上のため、観光に関する講演会などを増やしてほしい。

- ・ 2004年の語り部養成講座がよかった。語り部組織に入っていなくても受けられるような、行政や大学（1大学のみでなく連携で）のような中立的立場の団体に講座を開いてもらいたい
- ・ アンケート結果に興味があるので、何らかの形で語り部に講演してほしい
- ・ 県の講座を受けたり、古道の会での勉強に励み、わが村の事を後世に残したい。今後、若き語り部の養成をお願いしたい
- ・ 住民のお接待の心の醸成、受け入れ姿勢の向上
- ・ 語り部の個性に開きがあっては望ましくないので、エリア内での内容のすり合わせや研究会などが必要。発足当初より一度もされていないところもあると聞いた。高野山は、冬場は冬眠状態なのでこの時期にこそ充電が必要。
- ・ 三県共同のガイド養成をしてほしい
- ・ 現状は会として組織もしっかりとしていて心配はないが、若い人たちの育成が必要だ。
- ・ 常に学習、研修を行いたいので、その支援を願う
- ・ 大学で小・中学生対象の地元語り部の養成に取り組んではどうか。将来地元に残って語り部で生計を立ててくれる人がひとりでもいたら素晴らしい。
- ・ ガイドの会の会長や副会長に向けた、リーダー養成講習を実施する必要がある。役員は会の仕事に追われているので、一般会員の方が勉強を進めている傾向がある。
- ・ 歴史について系統だった研修を地域ごとに行ってほしい
- ・ 県や関係者から適宜勉強会を開いてもらい、ありがたいと思う
- ・ 世界遺産登録地域全体の基本的な共通語、共通マニュアル（テキスト）のようなものを作ってほしい。どうしても自分のエリアを中心とした話になり、お客さんが県内を巡ったときに話が一つにまとまらないのではないかと心配。
- ・ 英語の第二外国語の方たちにも通じる簡単交互表現で統一した全地域承認の資料を作ってほしい
- ・ 地域、町単位での専門の語り部を養成していく部会をつくり、定期的に会合を行って勉強をしていく形をとる必要がある。
- ・ 登録後一回も語り部をしたことがないので、最初はベテランさんについて見習いガイドと言う制度があるといい勉強になる
- ・ 地元の人たちが無関心な場合が多いので、地元の人向けの講座、講演会、宣伝物配布などが必要ではないか。実地を歩くイベントの企画も。
- ・ 語り部には、自分の健康や家族の健康が必要なので、できるだけ多くの語り部を養成することが大切

- ・和歌山大学に観光学部が新設されること、大変うれしく心強く思う。語り部も聴講できるように願う。
- ・道案内は、知識だけでなく体力、救急法など総合的なセンスが必要
- ・自分の担当範囲だけでなく、熊野古道全般についての学習を強めたい
- ・研究や発表の場を作ってほしい

c. 古道周辺の問題点について

- ・自分の担当地域にはトイレが少ない。「道」を整備する際に「街」の感覚で整備をするのではなく、登山・ハイキングの経験者に設計をしてもらいたい。
- ・大門坂駐車場休憩所と那智勝浦大滝前駐車場のお手洗いの新設に伴い、設備のバランスが、男性便器数70%で女性便器数30%であり、いつも列ができて苦情を受ける。女性の方が男性の3倍の利用所要時間を要するので、改善してほしい。
- ・古道のどのコースにもトイレが少ない
- ・花坂からの上り坂は碎石を敷いたため、歩きにくくなった。屋久島では勾配にあわせて階段の歩幅を変えるなどの工夫がしてあり歩きやすい
- ・当地は体験するには味わい深いところだが、交通整備ができていれば、時間的に少しずつ切り取った形で体験してもらえと思う。
- ・これからは個人客を誘い出す必要があるが、移動手段が問題。いくつかの古道を歩くためにバスの時間を合わせるのがとても大変という意見がある
- ・伊勢路はごみのポイ捨てがほとんどないが、一般道へ出るととても多い。
- ・大門坂駐車場の外側の造園工事は無駄な設備投資だ。自然の植物が充分あるところなので、工事費6000万円もかけずに節約してほしい。税金を無駄に使わないでほしい。
- ・古道標識（看板）が足りない。車の標識はあっても歩く人の看板が少ない。歩く人の目の高さの看板が必要。（馬越古道）
- ・3県共通の道標（マーク化、標識）を作るべき
- ・峠道だけでなく、里道、市街地路の道標を整備し、霊場への参詣道にすべき
- ・八鬼山の落書きが気になる
- ・川下りの到着店のところに、川原家があれば船から下りて温かいお茶でも飲んでもらえるのでいいと思うが今は何もない

d. 語り部組織の問題点

- ・町村合併により、熊野川町は新宮市の支部という立場になったが、受け入れ窓口は市なので、これまで自分たちが担当していた大雲取越えや小雲取越えの仕事が元新宮市の方にまわってしまうようになった。語り部間の話し合いがしたい。
- ・組織としてばらつきを感じる（共に育っていかうというよりは、主導権争いのようだ）
- ・組織に入会しても何もしない人が大勢いる。名前だけで満足していたり、親睦会や旅

行だけの目的で入会する人が多い。もっと自覚を持って勉強してほしい。少数でも確実に働ける人を養成するべきだ。

- ・現状ではガイド間のレベルの差が大きい
- ・保険や交通費は整備してほしい
- ・語り部は様々な人の集まりであるが、その中でも数名は芯になる人が必要

e.案内をする上での問題点

- ・本宮は他の観光地よりも宿泊施設の料金が割高感があるので是正が必要
- ・高野町石道は5里の急坂路なので、新しい語り部希望者が少なく、体力も必要なので、観光客には、短い区間を案内人に任せるようにした方がいいかもしれない
- ・旅行会社によっては余裕のないツアーを組んで短時間でお客さんを案内させようとする場合が多々ある。もっとこの地域に対しての理解が必要。
- ・語り部の案内は最大20名までとしたい。自分たちは観光会社ではないので、それ以上の依頼がくれば断ることにしている

f.行政、大学への提案・意見

- ・行政が、1年先、10年先、100年先の展望を示してくれない
- ・世界遺産登録以前からもっと先を見越した取り組みが始められていたらと思う
- ・行政に財政面の援助をしてほしい
- ・情報収集、アンケートなどの活動は定期的に行い、時系列的に見て今後の対応方法を決定して行ってほしい
- ・語り部に観光だけでなくもっと幅広い活動もさせて地域活性化に役立ててほしい
- ・大学で（観光）学部を作る動きがあるようだが、今回の遺産は文化遺産なので、観光に力を入れて文化を変化させることのないような支援事業をしてもらいたい
- ・「熊野古道」は広域なので、各市町村のばらばらな動きではロスがあるし活動内容もさまたげ。県がリーダーシップを発揮して、効率的に活動を推進してほしい
- ・「語り部」の必要性を以前から主張していたが、県主催でスタートしてくれて、各地からの協力者や知識人の多くの参加により、未来に明るい大きな団体になっている
- ・県全体で語り部組織をまとめるよりも、近隣の連携が必要ではないか（熊野三山に関わる新宮、那智勝浦、本宮の組織連携）
- ・和歌山県全体で行政、観光団体が一体となった取り組みが必要
- ・交流のために、語り部組織をつなぐような会報があると良い
- ・各エリアにおける語り部の人数の適正化が必要。本宮町は40名いるが、現状及び今後の見通しを考えると約半数くらいでもいいのではないかな。その整理の方法のひとつとして、検定試験が必要。
- ・熊野古道で町おこしはできるか？地域の活性化に役立っているか？（自分は修士論文

で少しはプラスになっていると書きました)

- ・一ヶ所の古道や町が好きで活動をしている人や道の修復作業、草刈など地域に根ざした語り部さんが多いので、これを生かして、グリーンツーリズムを定着させたいと願う。現状を見ながら今後のあり方を考えていってほしい
- ・観光と地元産業の相互発展関係を見つけてほしい
- ・人の健康、予防に楽しくつながる旅の提案
- ・姉妹都市、都会と田舎で相互にないものを通じて交流し、中期・長期で楽しむことができないか
- ・「緑・花・文化知識認定試験」の一級認定をもらった。特級に向けて勉強中。上記のご当地検定はぜひ受けてみたいので、早期の実施を楽しみにしています。
- ・ボランティア支援センターを確立してほしい
- ・ルートの保全に対して行政の関心が薄い
- ・観光ボランティアガイド全国大会を豊橋大会で立候補しているので、ぜひご後援してもらいたい
- ・国や県、市の援助で施設を建設する際は、実際に活動をしている人たちの意見を取り入れてほしい。(高野坂のトイレ、市内、情報センターは使い勝手が悪い)
- ・関西大学と明日香村のような関係があれば、展望が開かれると思う。

g. そのほかの意見

- ・「紀伊山地の霊場と参詣道」は山岳を背景とする精神的・宗教的要素の強い特異な文化遺産である
- ・「語り部」の範囲がどれを指すものなのか。多くの人は各市町村の限られた道案内に終わっているが、一度でいいから全部歩いてこそ「紀州語り部」だ
- ・古道ガイドは、個性が一番大切。花や歴史などそれぞれの得意分野を生かしていくべきで検定には疑問。自分はお客さんに「また来たい！」といってもらえることを励みにガイドをしている
- ・この活動は、行いが先で言葉は後の世界。歩きと講演の両方を伴ってこそ自分のみにつく楽しい世界だ。
- ・世界遺産を守ることの大切さを知ること、そのための着実なプログラムが必要だ
- ・回数を重ねる度に、語り部は大変な任務であることが分かってきた。熊野古道がブームにとどまらず、将来ずっと繁栄していけるかどうかは語り部にあると思う。今年も、今までどおり日々勉強をしてレベルアップした語り部で活動させていただきます、がんばります!!
- ・伊勢から熊野三山へ通して歩くことも今後考えると良い。今は、一つの峠を歩く日帰りのみだが、伊勢からの熊野詣を巡礼の道として再現したい

- ・都会に住んでいた人がにわかに学習して語り部をするのはなじまない。語り部は、その土地に生まれ育った人が、生活の営みを伝えることでお客さんが感動するのではないか。
- ・当地は文化遺産として登録されたので、自然遺産や建築物のように見てまわる印象が強い観光だと考えると当てが外れるのではないか。西国33ヶ所や四国88ヶ所と同様な巡礼を受け入れる体制の構築が必要。
- ・若い人を増やすことが大切なので、有料ガイドも必要
- ・定年後の思い出作りと友達作りに役立てたい
- ・歴史はロマン。自分の過去と比べて、見て、聞いて、懐かしみます。
- ・あまり難しい世界遺産の説明より、昔からのその土地の文化、営みのお話をすると思われる
- ・本当の「おもてなし」とは何か。地域の人たち、観光業関係の人たちを巻き込んだ何かができないものかと考えているところ
- ・語り部は、観光案内のみならず、地元の人に土地のことを伝えるべきではないか。若い人たちに、この土地に誇りを持ってもらえるように色々な機会に努力していくべきだ
- ・熊野古道と同じく、スペインのサンチャゴの巡礼道についても語れるように勉強をしている。地元のことだけを知っている人よりも、幅広い知識を持っている語り部の方が人気がある
- ・現在の会員の平均年齢は結構高いが、気力体力は十分で、元気にガイドしている人が多いのが熊野の取柄だ
- ・古道を訪れる人たちが地域経済に良い効果をもたらしてくれたらありがたい
- ・語り部は短期間ではモノにできない。何度も現場参りをすることが大切
- ・今後、どれくらいの人に来てくれて語り部を利用してもらえるか、かなり不安
- ・他の地域の語り部の人たちと触れ合う機会がもっとあればいいと思う
- ・語り部には年配が多く、内容も固くてつまらないイメージがある。もっと広く地域全体を紹介できる語り部が必要。若い人が語り部を職業にできれば、過疎にも歯止めがかかるし、若い客も増えるのではないか。
- ・語り部は、金銭目的ではなく、ボランティアになってほしい
- ・顧客が語り部を指名できるシステムを作り、レベルアップを図るべき
- ・白神山地に行った際、現地の方のガイドでまわり、東北鉛で半分以上聞き取れなかったけれど現地の人と過ごせたことが温かくて楽しかった。
- ・今のところ、語り部もそんなに必要とされていないのではないだろうか・・・
- ・世界遺産を活用した観光を企画する場合は、単なる物見遊山や一過性のツアーはやめ

るべきで、エコツーリズムの理念を取り入れた企画が今後主流になってくるだろうと思う。語り部は、この理念を持っているだろうし、広めていくべきだろう。

- ・日本人観光客の多くは、ガイドに支払う費用を出し渋る傾向がある。また、疲れないきれいな観光を望みがち。しかし、巡礼の旅は別のもので理解していただき、同じ道程をともに乗り越えることで、仲間意識の向上、達成感の共有を目指して活動したい。
- ・年配（50代以上）の方々は、歴史もある程度は知識を持っているが、若い人を案内するときはあまり知らないで戸惑ってしまう。
- ・地元の人にもっと自分のことを語ってもらえるようにPRが必要（2名）
- ・若い人がたくさん語り部になってほしい
- ・語り部をしていると、お客さんは、ガイドブック的な知識よりも語り部自身がどのような生き方をしているかに感心を持っているように思う。
- ・経済効果よりも、熊野信仰の原点に戻って現代人の心の病に対する効果などが研究されるべきだと思う。
- ・語り部は独自の研修ができる人やレポート発表ができる人が好ましく、他人の知識の受け売りだけで金銭にしている人も多い。研究者の人たちに気の毒である。
- ・知識を見せびらかすより、話やゲームをしながら楽しい思い出作りにしてもらい、満足してもらうようなおもてなしの心と下準備が充分でないとリピーターは望めないと思う
- ・三県でもっと連携を取るべきだ。ガイド量、人数制限がばらばらである。
- ・ガイド料が安いので若い年代の語り部が少ない